



TITLE:

<論文>記録をふり返ることと語る
ことの意味：自己教育の観点から考
える

AUTHOR(S):

鏡, 純香

CITATION:

鏡, 純香. <論文>記録をふり返ることと語ることの意味：自己教育の観
点から考える. 京都大学生涯教育フィールド研究 2013, 1: 23-34

ISSUE DATE:

2013-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/174243>

RIGHT:

【論文】

記録をふり返ることと語ることの意味 —自己教育の観点から考える—

銚 純香

Meaning of Reflection on the Notes and of Talking over Them
; from the Perspective of Self-Education

Sumika KASUGAI

1. はじめに

従来、記録と呼ばれるものは、「知の補完」の手段として扱われてきた。そして記録の価値は、信憑性の有無によって図られてきた。すなわち、そこに書かれた事実や事象に正当な根拠があれば、記録の価値は高く評価されるが、内容の根拠が希薄ないし不明瞭であれば、それは記録に値しないものとみなされてきたのである。それゆえに、個人が経験について記録として書くことの教育的な意味は、自己の探究や自己表現としての手段として捉えられることはなかった。言い換えれば、近代以降の社会に広まった個人がつける日記やメモ、家計簿などの個人的な記録の営みそれ自体を、一つの経験と捉え、その教育的な意味を問うことは十分にされてこなかったのである。

本稿は、成人が自らの経験を書きとめた個人的な記録を基に語ることを通して、経験を振り返るという行為とそれについて話すという行為に、自己教育としてどのような可能性があるかを探究するものである。このために、コミュニケーション論や文字の活用に関わる先行研究を踏まえて、聞き取り調査の調査資料についての分析・考察を行う。この作業を通して、記録者自身の記録という私的な営みが、語ることによって他者へと拓かれる中で生み出される自己教育の可能性を明らかにする。

本稿で取り上げるような個人的な記録の特徴は、以後の活用や他者の評価を意識して書かれたもののみならず、意識せずに書かれたことばも、記録として残るという点である。意図に関わらず、結果として生活の「log（軌跡）」が蓄積されていくといった記録の形態と、自伝や伝記のように意図的に「歴史」を残す記録の形態では、書くことの価値観や意味、内容が異なる。また、前者は感情や出来事、見聞きしたもの、感じたものなど、意識に上る事象についてあまり吟味されることなく書かれるのに対し、後者は読まれることを意識して、書く内容を吟味し推敲しつつ書かれるものである。

また、日記などの個人的記録として蓄積された経験をふり返るという行為は、主観的情報の断片が埋め込まれた地層を掘り返すようなものである。これは、例えば、従来の社会教育の取り組みの中でなされてきた自分史を書く活動や生活記録運動などとは異なる。それぞれの地層に保存された情報は、必ずしも文章化されず断片的で、書き手がそれ自体の

意味を問うことは稀である。つまり、生活記録運動が書くことによって、個々人の生活課題を社会的な問題として捉え直し、個々の生き方を問い直すような実践である。また自分史を書く活動は、地域や時代のなかの歴史性と自己の個人的歴史を連関させて、自己の存在を問い直すような実践であると言えよう。これらに対し、日記のような経験の記述は、その時その時の自分のための記録にすぎず、個々のテキストは必ずしも、個人と集団との関わりや社会的もしくは歴史的な意味を持たず、また一定の方向性をも持つものではない。

本稿では、このような断続的な個人的な経験の記録について、記述された内容を吟味するのではなく、記録するという営み自体に着目することで、記録という営みを、創造的な営みとして捉え直していくことを試みる。そのためにまず、日常経験を書くことにおける創造性とは何か、またそこから生成される自己認識のありかたについて、さらに、記録の習慣に内在する自己を超えていくような可能性を明らかにしていく。

分析対象は、日記や家計簿などの個人的な記録を書く経験を持つ女性 8 人に行った聞き取り調査によって得られた調査結果である。同調査は、筆者が調査対象者の指定する日時・場所に赴き、平均 2, 3 時間の聞き取りを行うというものであった。その間の会話を IC レコーダで記録し、会話中に記録したメモや日記、家計簿などの資料と合わせて記録を作成した。

調査対象者は、女性であること、調査者がある程度、相手の生活環境を把握できることを要件として選定した。日常生活について書くことを重視するため、対象は女性とした。日本社会一般の傾向性として、男性よりも、女性にとっての方が、書くことの方が相対的に生活や人生の出来事に近い営みである場合が多いからである。また、対象者が生活の中で書く行為を分析するにあたって妥当性と信頼性を高めるには、その対象者の生活のある程度把握できることも重要と考える。なぜなら、量的な分析とは異なり、質的な分析は、語り手（生活者）の経験的知識を前提として行われるべきものと考えためである。よって匿名性の高い量的調査ではなく、聞き取りの対象である書き手と継続的な関係性を築けることも対象者選定の要件となった。

以下、聴き取り対象者はアルファベット表記とするが、具体的事項については文末にリストを添付してあるので適宜参照されたい。

2. 日常の中の創造性と自己教育

2.1 日常の中の創造性

記録を用いたふり返りは看護や看護、医療などの対人援助における実践の場や企業でも用いられ、それを活用することで実践を改善、改革していくことが課題とされる。この場合のふり返りは過去を固定的なものとして一定の価値観で評価することによって成り立つ。しかし、個人的な記録における創造性は対人サービスの改善や産業の仕組みなどの改革といった一定の方向性を持つものではなく、ふり返るたびに過去に多様な意味を見出しながら、変動する日常と向き合っていく行為である。

従来、「日常」や「生活」は繰り返される固定的な世界として捉えられ、創造性は「日常」と乖離した問題として扱われてきた。しかし、近年の人類学の立場から、例えば田辺繁治は社会的規範の中でルーティン化された慣習的行為の反復は、変動と差異を伴いながら創造的な実践を生み出すものとして捉える概念として「日常的実践」という概念を提示して

いる¹。また、レイヴは人々が学校で習った「算数」を日常生活で用いる時、学校で教わる様式や規範に反して個々がどのように創造的に計算するのかを明らかにして、「学習の転移²」という概念を覆した³。このように、人は日常生活のあらゆる場面で経験から学びつつ創造的工夫や、変化をしながら暮らしているのである。

また、日本人の日記に特徴的なのは天候から始まる記録が多いことであり⁴、日々変化する天候の記録から始めることで書きやすくなるという。それは日記には日常における「差異」が記録されるからであり、これは「繰り返される日常」において非日常と出会うことであり、日常が日常でなくなる瞬間である。一方、旅日記において旅は日常であり、戦中日記では戦争が日常、闘病日記においては病が日常となる一方で、ごく普通の日常の一場面が伝え、残されることで胸を打つ特別の風景として記録される場合もある。日記の習慣は「繰り返しのようで、常に変化している日常」として、また時には「毎日違うようで同じことを繰り返している自分」が認識されて、日常と非日常を越境する。この時、それぞれの認識に個々の感情が伴う。繰り返される日常に安堵したり、嫌悪したりし、日常における変化と出会い、感動したり、衝撃を受けたりもする。日記につづられる「日常」の世界はそれぞれの感情と関心に即して創造されていく。

2.2 「記録」における創造性

何らかの事象についての記録の形態は何を使用するかによって多様である。なかでも、本稿で注目する手がきでノートに書くことは、日常経験の記録としてどのような特性を持つだろうか。他の文字、活字、写真、動画、音声などの形態をとる記録の媒体との比較から考えたい。

それぞれの記録は、情報の創造・共有・伝達の仕方が異なり、文字、活字、写真は視覚の情報として、動画は視覚と聴覚、音声は聴覚の情報を伝達する。また、文字や活字、音声はことばを伝え、動画や写真はどちらも一定の枠の中に映像（画像）を記録する中で、作り手の意図しない事象も入ってくる。港千尋は 9.11 の映像を例にとり、アクシデントの記録は絵画とは違い、カメラやビデオを構える人々の予期しないものを記録し、その記録は現代社会の抱える問題を突きつけてくるとした⁵。また、写真は意図的に切り取られた日常の一瞬、一場面が動的な日常から遊離して、見る者によってはそこに何らかの意味が見出される。

一方で、紙につける日誌・日記は経験や日常で出会った事象について、個人の思考と感情、身体と言語能力などの複雑な濾過装置を通して選択、構成される主観的記録である。この記録をふり返った時、ことばの断片としての記憶が、時の経過のなかで変化した書き手の心情や記憶と齟齬を引き起こしたり、疎外された記憶を引き出ししたりすることがある。また、文字の記録は記録された出来事や事象を視覚的に限定しないので、その時の風景を想起する段階で、読み手の想像力を働かす余地が残っており、ふり返るたび多面的な記憶の風景を生成する。記録する段階においては、何をどのように記録するのが書き手の選択と価値観に委ねられ、「文字で表せることのみ表す」という制限を背負いつつ、書き手は経験から知を生成する。

日記に書かれる日常の世界は、書き手による経験の選択と分類、統合の連続である。しかし、その選択は必ずしも自在ではない。使う言語、道具、書く空間や生活様式など様々な制約や限定を受け、書かれる内容は生活経験の一片でしかない。日記における創造性は

むしろ制約のなかの創意工夫にある。いっどこで何をどのように使って書くか、日記には個人の身体感覚を含めたこだわりや書きやすさ、見やすさ、心地よさが追求され、ペンや手帳に関するこだわりから、書く場所や時間へのこだわり、記号を使った記録やチケットなどの貼り付けなどの内容の独自性、手書きの文字の個人の特性などに「自分らしさ」が表れ、この記録の独自性も固定的ではなく、繰り返しのようでも変化していく日常と書き手の感覚や心情の変動にそって変化する。

2.3 自己教育概念について

日常生活の創造的実践のなかで私たちは多くを学ぶ。「学び」の概念は一般に学習者が主体となる自発的なもの、と捉えられ、「教える」場である学校教育の限界が語られる今、様々な場で「学び」という言葉が好んで使われるようになった。しかし「学び」ということが指し示す様態は広範で分かりにくい。同時に、実際に学ぶことの多くが必ずしも主体的に選択できないにもかかわらず、「学び」という概念は学習者の主体を前提とし、その不確実性を問いにくい。

よって、ここでは「教育」という概念で、個人的な記録の営みを捉え直したい。日本における「自己教育力」概念は主に、初等中等教育の学校教育政策において、確かな学力の一つとして提唱されてきた。一方、海外における「自己教育」にあたる *self-education* や、*self-directed learning* などの概念は、主に 1970 年代の成人教育の重要性への注目から登場した概念であり、ここで記録の活用は 1980 年代の研究において「*writing journal*」など実行戦略に焦点を当てた教育工学的な視点から検討されてきた。これらの自己教育概念は、複雑で知が流動化した現代を生きるために自ら課題を発見し、学習し、解決することができるような主体的な意思、態度、能力などの獲得を提唱する⁶。

日本において、自己教育に関する問題意識が初等中等教育に集中し、高等教育以降では手薄であるのは、自ら学ぶ力が教育によって人生の初期の段階で獲得されるものという価値観の反映であり、このような価値観は、成人の主体性や、学ぶことの自由と責任の所在を問うことを難しくする。しかし、それは成人が主体的な学習者である現状の結果ではなく、むしろ成人の学習の主体性や学ぶことの自由と責任を問う機会が与えられないことで、その問題を覆い隠しているにすぎない。

近代の自己概念は、他者と独立した個人のイメージを確立してきたが、現実生活における自己は他者との相互作用のなかで表れ、忘却と多様な他者との接合において変容する極めて不確かな存在である。よって自己教育は他者との相互作用と不可分であり、自己の主体を問うこと一むしろ不確かさを知るところから始まる。だからこそ、生活の中の断片的な記録をふり返ることで、自己のあらたな側面を捉えることができるのである。

ただし、本稿ではこのような個人的な記録の教育的な意味を自己制御する工学的なものとして捉えるのではなく、学習する側の主体の獲得や技術や能力の向上を目的としない前提の個人的な記録によって自己教育概念を再構築する。それによって、個人的な記録によるふり返りが、他者と自己とのせめぎ合いのなかで自己を知り、自己を超えていくような学びを創出する可能性を明らかにしたい。

教育とは学習者が生活する環境において、社会的、文化的な慣習や態度、技能を獲得する上で、他者の介入を前提とした実践もしくは生活における営みとして学びを創出する。つまり、自己教育とは他者を排除することではなく、他者との関わりや結びつきを自ら選

択するための他者からの断絶と接合である。他者を断絶した内省を通して自己認識を深め、自己に関わる他者を認識し、関わり方を選択していくのである。

2.4 自己教育への入り口として一自己の不確かさを知る・記録による自己認識

私立学校の教師である G さんは、日記をふり返り、「学び」が成長や望ましい変容を伴うべきだという認識から、同じようなことを繰り返す自分への羞恥を語った。しかし、彼女は「学ばない自分」を認識しながらも、日々のニュースや意見を書き続ける習慣を継続する。また、地域コミュニティ活動で子どもを教える C さんは、日記はつけるが、家計簿をつけることはできないという。その理由として、以前、家計簿をつける試みで、数字を書くことが不快だったこと、収支をコントロールできない自分へのいらだちが挙げられた。また記録への試みと失敗をふり返り、彼女はお金のことに細かいのは嫌だという価値観と同時に、金銭管理のできない自分への内省に言及した。

以上の二つの事例が示すように、日記の試みは生活における自己の行為の見えなかった部分が明るみだされることで、感情的もしくは倫理的な自己評価を引き出し、あらたな自己認識につながる。二つの事例は「学べないでいる自分を知る」というネガティブな事例であるが、ポジティブな自己評価を引き出して自己肯定感を強める場合に比べ、葛藤することで「学習したい課題」を引き出す。しかし、日記における現実的な他者の不在は、葛藤をそのまま放置するか、葛藤を乗り越えるための創意工夫や努力を行うかという選択を、書き手自身の意思と行動にゆだねるので、葛藤が乗り越えられずに消極的な自己評価にとどまる場合もあり、これは日記の私事性の弱点である。

しかしここで指摘したいのは、日記という営みが生活する自己の不確か性と、継続的記録によって表出した自己の新たな一面について知り、評価できることの自己教育的な意味である。「教育」において、学習者理解を深めることは「教育」自体を左右する前提である。日記を書くという経験によって、日常のなかで自らをふり返る時間と空間を持つことが自己認識を深め、生活の中での選択を支えるものとなる。日常における選択の幅が広がり、それに伴う責任や迷いの多い現代の生活において、ことばにされた記録を頼りに選択を行い、失敗や葛藤、不安、憤りなどの感情を受容しつつ、自己認識や自己肯定感を高めていくことができるのではないだろうか。

3. 忘れることと記録をふり返ること

C さんは日記をふり返る折、辛かった時の記録に行き当たり、非常に辛くて忘れられないと思っていた出来事を、既に忘れていた自分に気づいて驚き、「生きていけばいいことある」と語った。一方で、彼女は日記の記録によって辛い出来事を思い出すことが、いいことがどうかかわらない、と言う。

記憶の変容と忘却は一般に否定的なものとして捉えられ、学校でのテストで測られるように、より正確な記憶を適切に想起できることが重要な課題だという認識ははまだ根強い。しかし、今や正確な記憶の蓄積と適切な想起においては人間よりコンピュータの方が長けている。外山滋比古は、人間は忘却することにおいて、コンピュータには出来ないやり方で、より創造的に「記憶」を活用しており、忘却はもっと積極的に捉えられるべきだとする⁷。また、シーナ・アイエンガーは、理想と現実ギャップを埋めるために自らの選択の結果を納得のいくものだとする「物語」を作って不一致を解消するという⁸。つまり、

人は無意識的に忘却すべきことを忘却しながら、現実を生きるための物語や自己認識を創っていくのである。

このように、人が生きていく上で忘却は、事実に対する認識を歪めつつも、時に生き難い現実を生きていく支えになる。日記に文字として保存される記録と、忘却し、変容する身体的な記憶との齟齬から自己の変容に気づくことで、「なんとかなる」という未来志向の考え方へと転換できると同時に、記録の所有が過去の辛い経験を抱えて生きることを強いるような側面も持つ。記録に残された「主観的な事実」の断片をどのように意味づけするかによって、書き手の自己物語は変容するのである。

日記における「意味や物語」は、書き手のフィルタリングを通した記録の地層を掘り起こし、そこに見出された「事実」を関連づけてふり返る時に生成され、そのふり返りが聞き手に対するライフストーリーとして語られたり、自分史などの文字としての物語として表現されたりして、改めて他者に向けた「ことば」となった時に生成される。また、記録を一人で読み返す折は、それを活用するなかで、自己肯定感や気づきを得たり、言語化しないままに自己のうちの新たに表出する部分を認識したりするが、それは継続的な記録という営みの時間の経過による記憶のズレや認識の客観化によって可能になるものである。

ここで、個人的な記録の営みは他者を断絶して行う未来の自己と過去の自己との閉じた文字コミュニケーションであり、次章では、この閉じたコミュニケーションによって生成された記録をふり返ることで、閉じた文字コミュニケーションのなかで他なるもの（他者の記憶や過去の自分）と出会い直すことの意義を再考し、それが語られることで他者へと拓かれた時の可能性を考察する。

4. 「書くこと」と「語ること」—自己を超えていくコミュニケーション

ここでは、現代的な書くことの状況を視野に入れつつ、日常を「ことば」にするものの可能性と書くこと、それについて語ることとの関係について考察を深める。「生きること」が人とももの、出来事や事象、世界と出会うことであるならば、「ことば」は、その出会いから学ぶ一つの媒体であり、記録を残し、その蓄積された記録を再び読み返し、語ることは、過去の経験に学ぶための文字として、そして声としての「ことば」が重なる重層的なふり返りである。まず、文字による自己の内の閉じたコミュニケーションの重要性を確認したのち、その個人的な営みが経験を他者に語るという拓かれたコミュニケーションの場で語られる時、どのような自己教育的可能性があるのかを明らかにする。

4.1 評価されることで萎縮する文字コミュニケーション

日本において記録されてきた近世以降の家計簿や日誌などは、書くことと語ることの共存する営みであった。なぜなら家庭や共同体で共有される記録として、日記が日課として家族の前で読み上げられる場合もあり、記録は必ずしも私的に所有されるものではなかった。では、個人的記録から「語ること」が排除されて、私的に書くことが一般的になったのはいつであったのか。私的な日記の普及は明治中期といわれ⁹、この時期に行われた学校教育における日記指導も現代の日記にも通じる重要な役割を果たしている。

明治期の日記教育には、生徒の内面と生活の管理を目指す明確な発想があった。「教範」とされる教師用の指導書『小学校用言文一致教範』（明治35年）において、日記は綴り方の練習材料であると共に家庭生活の報告書でもあった¹⁰。国語の作文指導の一環として「日

記指導」が行われ、国語力の獲得だけでなく、自己形成や生活管理の機能への期待もあった。現代でも、日記が自己表現を鍛錬する手段として、もしくは生活を管理するための道具として捉えられることは多い。しかし、日記などの個人的記録の営みは必ずしもこのような目的に集約されない。

聞き取りにおいて、全ての女性が手書きの日記を書くことを楽しいと語り、書くことへの肯定的な態度を示した。このような私的な生活の中の営みとなった日記は管理や発達の手段としての意図を超えて、それ自体が目的化し、書くことと残すことの楽しさを担うものとなる。

このような一人言のように閉じたコミュニケーションとしての記録は、必ずしも目的やメッセージ性を要しない。荒川洋治は、日記に書きとめられた無意味なことをふと書きとめることがあるといい、その例として杉山平一の「訪問」という詩を挙げる¹¹。この詩は訪問時の 20 秒足らずの一場面を、時間を追ってただ書きとめた記録である。時間を追いつつ書きとめられる日常の何気ない記録や、ふと書きとめたことばは何に使うともしれない無意味な記述のようだが、その一瞬を写し出し、目前の出来事や事象のひとつひとつを描き出すことで、日々の場面をつくり出す出来事や心象と丁寧に向き合う面白さや愉しみを知ることができる。そして、日常をいつくしむような心性を養うことは、経験や出会いから豊かに学ぶ上での感性と態度を育てることでもある。浮遊することばの記録が生み出す可能性は、目的を問われない日記の記述の自由さ—書くことの「あそび」が許されるからこそ可能になる試みである。

自己教育の文化史研究を行うディヴィット・ヴィンセント(2011)は、社会生活の様々な局面で広まっていく「機能的なリテラシー」をマス・リテラシーの登場として描きつつ、リテラシーの受動的所有と能動的活用の区別に関する分析的な視点をを用いる。そして、歴史的に文字の「活用」が教育的な課題であったことを示しつつ、読み書きができるようになった人がそれを用いてなにをしたのか、どのような文脈で利用されたのかに重点を置き、従来の口承伝統と読み書きの伝統、大衆文化とエリート文化、識字と非識字などの従来の分類では捉えきれない複雑な現状を明らかにしている。彼は実際の社会生活における遺言状・日記・ラブレター・自叙伝などを書いて自己の内面を伝えるリテラシーを、自己の内面と意思を伝える「機能的なリテラシー」としている。そして、リテラシー概念が制度化され、文節化されるなかで、小説とノンフィクション、遊びと仕事の間に引かれた境界線が、「文字コミュニケーションの可能性を切り開くよりも、むしろ掘り崩してしまった¹²」としている。

文字の活用と自己教育の可能性を考えるにあたり、学校や職場で学ばされる書くことへの評価や価値づけが、時に書くことから人を遠ざけ、また時には自らが書いたものへの信頼を欠いて劣等感を抱かせてしまうという現状は無視できない。書くことへの価値観の学び直し (unlearn) は成人の学習者にとって一つの課題である。日記を書くことに関して「書くことは青年期の自己形成に関わるもので、年を取ってからもそのような内容を書くのは格好の悪いことだ」(H さん) という認識や、単に楽しさが動機であり、「ちゃんとした記録ではない」ということへの恥ずかしさが語られる (G さん) ことがあり、こういった認識からは、学校教育において優劣をつけられる「書く」という概念や価値観への捉われが明らかとなった。

北本正章は現代の学校教育における文字の獲得について言及し、「「効率神話」のなかで標準言語の普遍化を担うはずの公教育が、人々のあいだに新たな知の断層を生みだしている¹³⁾」ことへの危惧が深まっているとするが、このような知の断層を緩和するためにも、学校や仕事の場で浸透している書くことへの価値観や評価を再検討、再構築していく必要がある。それは結果として日記を書くことと書かないこと、忘却と記憶、文字か記号か、などの書く場面における多様な選択をそれぞれの文脈において価値あるものとして肯定することでもある。

よって本稿では、日常のなかで「ことば」を活用し自己のあり方を創造的に再構築していく可能性と複雑性に迫りつつも、それがいかに「機能的なりテラシー」として捉えられるかという視点からは一線を画したい。そして、読み書き能力の能動的活用が、現代生活において有意義な役割を果たし、それが今も教育的課題とされることを考慮しつつも、農業や子育て、闘病など人生の出来事と経験を通じた知の生成と学びに関わって文字が果たす役割が、相対的なものにすぎないという前提に立って再考することでこそ、書くことの可能性が豊かに拓けると考える。

4.2 閉じる文字コミュニケーションの重要性

コミュニケーションが他者とのやり取りや相互作用を前提として、「拓いていくもの」であるにもかかわらず、「閉じる」とはどういうことか。ここで、コミュニケーションを他なるものとの相互作用を通じて、何らかの意味を生成することという広義の意味で考えてみる。文字を記録することにおいて他なるものとの相互作用が生まれるのは、文字を書く時と記録を継続した時である。前者は文字という他者との相互作用であり、後者は書き手でも読み手でもある、過去と未来の自分との相互作用である。文字は他者と意味を共有するための媒介となるものとしての他者性を潜在的に持っており、書き手が自らの感情や経験をありのままに書くことの難しさは文字のもつ他者性も一つの要因である。

近世以降の日本では多くの女性の日記が書かれてきた。北田幸恵は書くことにおける女性性を「公的なものと結びつくことを阻まれてきた女性にとって、特別の文学の素養がなくても、検閲のない世界で自分の思いを紡ぐことができる日記は、重要な自己表現の手段であった¹³⁾」と考察する。また、明治前期の中島湘煙、樋口一葉の日記は、階級とジェンダーの境界に身を置いた時の自己の危機の克服と深く関わっていたと考察した。

湘煙は日記に「他者が介在しない、自分だけが作者で読者であるという過去と現在の二重化された自己の対話の面白さの自覚¹⁴⁾」を記し、過去の自分から未来の自分に向けたメッセージとして他者の目を遮断した贅沢な時間の流れを感じている。と同時に、文字で書かれている以上、他者の目に触れる可能性を孕む日記の逆説的な性格もある。一葉の日記も内面の発露でありながら、書いても処分せざるを得ない部分がある。北田は書くことにおける複雑性と虚実を通し「自己を語る」ということ、人間にとっての「事実」は慎重に吟味されるべきだとする¹⁵⁾。

北田の言うように、「事実」や自己についてありのままに書くことは困難であり、むしろ確からしい自己や事実を追求することに意義をおくと、書き手を「真偽を問う」という価値づけで追い詰めていくことになる。評価されないところで多様な自己と多様な事実を重ねて意味を生成していくことの楽しさが教育的な意義を持つのではないか。

現代女性の生活や現状は、近世以降の社会から引き継がれる部分と異なる様相を呈する

部分とがあり、日記における「検閲のない世界で自分の思いを紡ぐ」女性性の系譜を考慮する必要がある。今日、機能的な手帳の装丁が男女共に使用されるものとして多様化したのに比べ、販売される日記や家計簿の装丁は男性を想定したものよりも、女性の利用を意識したものが多い。このように生活を日記につづる習慣は女性のものという社会的意識があり、これは近世以降の女性の日記にも引き継がれてきた。

しかし、近代女性と現代の女性の状況を同列に並べることはできない。現代では情報発信と情報の活用の頻度が高まって、書くことの自由が享受されるかに見える。しかし、個々人の生に関わる制限や情報統制、管理され、評価される仕組みは不可視なところでより強く働き、逆説的に自らの人生にとって重要なことは「語れない」という状況がある。つまり、インターネットなどの一見「検閲のない世界」にある規範意識や感情論などによる隠れた制約や、自己開示できない環境で生活してきた個人が抱く自己開示への危機と恐れ、もしくは語ることば自体を紡ぐことができないなど、語る自由と語ることの危機が共存するダブルバインドに直面して男女問わず「語れない」という反応になるのではないか。現代社会において管理され、評価されることに慣れた個人が語ることの危機に直面する時、暗黙に支配される価値観や基準からより自由な日記の営みのなかで、書くことの意義を再確認できるのではないか。

4.3 「共有できない部分」から始まるコミュニケーション

現代生活における「ことば」の伝達と共有の場面は対面のコミュニケーションから、遠隔コミュニケーションにおいてはインターネット空間のやり取りやメール、電話やテレビ電話などの時空間のずれを伴いつつ、多様な形態のことばを伝える手段が発達する。そして、情報機器を活用できる環境下では、手書きの文字による表現と伝達のスタイルは署名などの個の存在を証明する場合を除き、その必要性を失いつつある。情報伝達の手段の精緻化、高度化は「ことば」を伝える場面における同時性や即時性、共有する経験の同質性の追求に価値を置く。

対話では、ことばのやり取りだけでなく相手と自分との身体や場の相互作用を通じ、ことばの意味や話題の方向性が動的に生成されていく。対面で語ることは、もっとも感覚的かつ文脈的な情報を多く同時に共有、交換できる利点があるが、それが必ずしもコミュニケーションの深化につながるわけではなく、情報を共有する場合の同時性が情報に関する理解を促すわけではない。むしろ、時間や空間がずれたコミュニケーションの分かりにくさが、他者を理解しようとする努力や自己の意見の問い直しにつながる場合や、対面でない方が視覚的・感覚的なバイアスや対面による緊張を免れるために、ことばの意味それ自体の伝達と共有には適していると感じられる場合もある。

例えば医療現場における交換日記によってコミュニケーションが円滑になり、聞きたくても聞けなかったことが聞けるようになり、関係性が深化したという研究もあり¹⁸、他者と交換する手書きの記録は、即時性や場の共有による制限を緩和して、伝えあう関係を構築する。

4.4 身体と声—自己と他者との断絶と共振

記録についてふり返ること、語ることを考える上で、共有のできない部分を創るものとしての身体を捉え直す必要がある。経験や捉え方、考え方の同質性だけでなく、共有できない差異が想像すること、考えること、他者を知ることへと向かわせるとするならば、記

録について語ることは、同じ言葉を異なるものとして受け取り、それを互いにフィードバックすることであり、そのズレや空白を埋めるための相互作用は、他者理解を深めていく過程となる。

身体は他者と共有できない感覚、知覚によって、自己と他者とを断絶するものであり、なおかつ、過去の自分と今の自分とを断絶するものでもある。コミュニケーションに関する議論においては、共感や共振が重視されるが、コミュニケーションとしての相互作用の発芽は実はこの断絶にあるのではないか。

空間を共有する「おしゃべり」における声は、身体的な共振を伴うことばを媒介にして、意味を生成し¹⁸、また、誤解や理解のズレなどの危機にさらされながら、感情や状況に依存しつつ、互いにことばの意味をフィードバックし、「それぞれの理解を創出¹⁹」する。一方で、手書きの文字は声の共振とは異なることばの身体性を持つ。

手書きの文字は、書く個人と文字との付き合いの歴史を表し、身体や感情、書く道具によっても変化する。そして、他者が手書きの文字から書き手の性格などを推し量るだけでなく、自ら日記をふり返る時も、自身の内面や感情を認識する手掛かりとなる。

文字は個人の性格や文字との付き合いの歴史、心理状態などが表れる多様性をもったことばであると同時に、それを視覚的に捉える事ができ、記録として蓄積することのできることばである。しかし、文字の記録は豊かな文脈を持つ生活世界から視覚的な断片として遊離されたものである。この文字コミュニケーションは時間のズレを伴う非同時性、個性や他者との間接性を特徴とし、「身体の位置する現在の生活世界」から距離を取り、対面の「關技巧コミュニケーションの空間」との関わりを切断して、自らのことばと感覚との腑に落ちる場所を探して、内的な対話をしつつ、経験や意味の分類と整理、因果関係などの情報を文字化していく。

また、自らつくる記録は自身の、身体的に「わかることば」を用いた経験の創造である²⁰。現象を腑に落ちることばで言いかえるためには、現象を自らの視点で捉え直し、適することばや記号を選択する必要がある。この過程は自己内の「ことば」の意味と、感覚的な経験を照らして自らと対話する空間を創出する。この空間は電話の相手と話す時のように身体的かつ空間的な相互作用を伴う他者が不在の閉じた対話空間である。電話と異なるのは問いかけ、応答する声が、鉛筆とノートなどの書く道具を介して自己のうちから引き出される点にある。

閉じたコミュニケーションとは、自らの身体との対話でもあり、そのうちで他者と出会い直すことでもある。そしてそれは、他者と断絶しつつも、接合を期して自己を問い直す過程でもある。この過程において生成する自己の重層性、他者と出会い直すことの豊かさは、文字の記録によって経験を統制していくだけにとどまらない。以下では、記録の限定性、文字の持つ限界が逆に語りえない部分にどのようにアプローチしうるかについて考察する。

4.5 自己を超える部分を捉える「ことば」の可能性

閉じたコミュニケーションによって生成される文字としてのことばは、ことばにできない部分をもとどめうる点で自己を超えていく可能性を持っている。湯川博雄は人が独自の経験を生きる時、ことばにして語れず、また一般化できないために概念化して語ることからはみ出してしまふ部分が含まれるという。その個としての私を越えていく空白の部分

<過剰な部分>と表現して、「<単独なものである私>の独自の経験に固有なもの、独特なものは、こうした<過剰な部分>につながれている。<経験されないまま経験されたなにか>」につながれているとする。この語ることのできない空白の部分の経験は、私にとって重要であるにもかかわらず、一回性の再現不可能なものだという。そして、書くことはそれが可能なものを語るということ、言述しうるものを名付けるだけでなく、語りようのないものを語ることも向かっていくという²¹。

以上のように経験を書くことは、経験とことばの<不適合>に直面しつつも語ろうとすることである。記録という「書き残されたテキスト」は時を経て過去の経験の断片をことばとして伝え、それを読み返す時の私が、重要なことなのに語れないう空白の部分語っていく契機となる。聞きとりでは、日記をもとにした対話がまさにそのような契機となった。

Eさんは40年近く日記をつけ続ける女性が日記の数々を手にとってふり返り「あの時は分からなかったけれど、いろいろな人に支えられててんな」と語った。言語化されないまま経験されていたことが、時間の経過を経た記録をふり返ることで改めて認識されたのである。このように書かなければ忘れてしまったことも、書いて残しておくことで、ある時ふり返り、その出来事の経験がつながっている空白の部分語りだすことを可能にする。

5. おわりに

本稿では知の補完としての「記録」から、創造的営みとしての「記録」へと捉え直すことで、自己教育的な可能性を追求してきた。そして記録をふり返る時、生活世界から抜き取られて視覚的な断片となったテキストを読みかえし、再び異なる文脈で読み変えていく過程で、忘却や齟齬を積極的に捉え直した。それによって気づきや変容をもたらす契機となる他者と自己との対話の在り方を展望した。

書くことと語ることの接点において、記録という文字コミュニケーションの非同時性と語りという場を共有するコミュニケーションの同時性が交わる時、記録における断片的な「事実」を関連付けながら意味や物語が生成する。この時間の経過を経た多様な時点での自己認識と物語や意味の生成は、記録によって時間と空間の多層性の中で他者と自己と出会いなおすことや日常と他者をまなざす感性と態度の獲得を可能にする。

日記の営みは自己と対話する創造的な行為であるのと同時に、一度習慣化してしまうと、他者の視線を遮断しやすい営みとして、矛盾や葛藤なく経験知を記録し続け、その所有に価値を置き、内容や自己を問い直す機会を逸する可能性もある。例えば、生活記録や自分史の実践のように他者との関わりのなかで書きつづる自己の日常的な経験や葛藤から、社会と自己との関わりを明らかにしていく問い直しの機会を得られる保障はない。つまり、個人的記録の習慣は他者との直接的な相互作用や一定の方向性を持たないので、記録の習慣が現実的な行動の変容や意識変容に至るには、書き手自身の向上心や変化への意思が前提となり、それなくしては記録による経験の所有への安心感や満足感にとどまりかねない点は記録による自己教育の限界である。

註

- 1 田辺繁治『再帰的人类学における実践の概念 ―プルデュエーのハビトゥスをめぐり、その彼方へ―』民博博物館、2002。
- 2 学校教育で習ったことが日常生活においても支配的であるという考え方のこと。
- 3 ジーン・レイヴ『日常生活の認知行動―ひとは日常生活でどう計算し、実践するか』新曜社、1995。
- 4 港千尋『写真という出来事 クロニクル 1988-1994』、フォトブラネット、1998、p.3。
- 5 荒川洋治『日記をつける』岩波書店、2010、p.49。
- 6 「看護大学生の自己教育力に関する一学生の自己教育に関する研究の動向―」生命健康科学研究所紀要 第2号 2006 p.8。
- 7 外山滋比古『メモと日記の方法』潮出版社、1980、p23。
- 8 シーナ・アイエンガー『選択日記』文藝春秋、2012、p.54。
- 9 山守伸也「現代日記論―日記をめぐる社会学的考察の試み」『人間科学』第69号
- 10 高橋修編「作文教育のディスクール」『ことば・ハビトゥス・イデオロギー』小沢書店、p.241。
- 11 荒川洋治『日記をつける』岩波書店、2010、p.74
- 12 ディヴィット・ヴィンセント(北本正章)『マス・リテラシーの時代』新曜社、2011、p.232。
- 13 同上、p.315。
- 14 北田幸恵『書く女たち』學藝書林、2007、p.343。
- 15 同上、p.344。
- 16 同上、p.386。
- 17 同上、p.44。
- 18 'Japanese Society of Pharmaceutical Health Care and Sciences' p.1-564。
- 19 佐藤建二『ケータイ化する日本語』大修館書店、2012、p.37。
- 20 同上、p.51。
- 21 湯川博雄『応答する呼びかけ』未来社、2009、p.29-30。

本稿中で用いた聞き取り調査のリスト

- Aさん (25歳 京都府在住 中学校教員) カフェの一角(対面)で話を聞く。(2010/08/07)
- Bさん (70代 熊本県在住 主婦) Bさん宅和室にて隣に座り、メモや数冊の家計簿を見つつ話す。(2010/08/12)
- Cさん (40代 福岡市内在住 主婦) Cさん宅近所のカフェで対面で話す。(2010/8/13)
- Dさん (40代 京都府南山城村在住 主婦) Dさん宅の居間で、対面で話す。(2010/10/20)
- Eさん (70代 京都府南山城村在住 主婦) Eさん宅に一晚宿泊、雑談しつつ話す。(2010/10/21)
- Gさん (40代 京都府在住 英語教師) 職員室の隣の団楽室にて聞き取り (2010/10/13)
- Hさん (61歳 京都府在住 非常勤 国語講師) 職員室の隣の団楽室にて聞き取り (2010/10/13)